

「入来花水木会」



入来院 久子

の方々におんぶに抱っこでお世話になっている。それにしても鹿児島市内や霧島市からも行事の度に入来までお越しくださるメンバーがいてくださって、それを思うと尚更、感謝の気持ちが溢れてくる。

2021年に「入来花水木会」を再興して、今年で三年目に突入した。本年度からは薩摩川内市から活動助成金もいただけて、事務局を中心に張り切って活動しているつもりだが、如何せん「入来麓」に移り住んで私はまだ五年しか経っていないし、そもそも鹿児島で暮らすことすら初めてで、尚且つ車の運転が苦手で地図も読めない私は、鹿児島県全体の地理や何号線といった道路の名前すら未だに頭に入っていない。なので、自分からは鹿児島市内まで、なかなか出かけられないで引き籠っている状態で、様々なことで事務局や会員

「入来花水木会」主催で昨年から開催している「入来麓たのしいまち歩き」には県の景観アドバイザーである石田尾博夫先生の協力の下、鹿児島大学、第一工科大学、鹿児島女子短期大学の各教授の方々がそれぞれ学生たちに声をかけてくださり、遠方からまち歩きにご参加してくださっている。一般参加者は新聞の広報欄を読んでご参加くださる高齢の方が多いのだが、大学生が大勢参加してくださることで、老若男女が参加する賑やかな、名目通りの「たのしいまち歩き」となりとても嬉しい。

この「入来麓たのしいまち歩き」は若手の

会員2名に入来麓の観光案内所で貸し出して
いる甲冑（足軽・武者）を着ていただいて参
加者をオモテナシしているのだが、そのうち
一人が霧島市在住の会員で、彼は今年も早起
きをして入来麓まで来てくださり、甲冑を身
に着けて参加者と共に5月下旬の暑い中、ま
ち歩きをしてくださった。頭が下がる。それ
でも、特に学生たちは甲冑が珍しいので自分
も着てみたいと思うらしく好評なので、申し
訳ないがこの企画は今後も続くと思われる。
どうか2人の会員には体力維持に励んでいた
だきたいと思う、ある意味酷い会長である私。
それでも昨年は秋に開催し、今年は春に開催
となった「入来麓たのしいまち歩き」は、毎
回定員の四十名を大幅に上回る人気イベン
トなので続けていくべきだと考える。

そして、今年2023年はなんといつても
「入来文書」を世界に発表してくださった朝

河貫一博士の生誕150周年という記念すべ
き年である。昨年も東京から「入来文書」の
翻訳本の著者である矢吹晋先生をお呼びして、
入来花水木会と入来郷土歴史研究会の会員や
「入来文書」に関心がある薩摩川内市の方々
に質疑応答形式の講習会を小規模で開催した
のだが、朝河貫一博士の生誕150年に当た
る本年は大ホールで大勢の方々に聴講してい
ただきたいと切に願っている。特に入来麓に
暮らす住民には是非聴講してほしいと願う。地
元住民こそ「入来文書」が何たるかを正しく
理解していただきたいと思うのだ。そうすれ
ば、この伝統ある入来麓がどれだけ日本に、
いや世界に誇れる素晴らしい土地であるかが
分かるはずだから。それを知ることによって自分の
住む町を心から愛する気持ちが生まれれば、
過疎化も防げる気がするからだ。

“灯台下暗し”と言うように、当たり前

ように古い石垣の風景の中で生活し、城跡のお堀や古い石階段が残る場所にある小学校に通いながらも、かつてこの麓で薩摩武士がどのように生きていたのかということはあまり関心もなく過ごしている気がするので、まず親から率先して学び、その姿を子や孫に伝える行つて欲しいと祈るのだ。

「疱瘡踊り」や「神舞」など、入来に伝わる無形民俗文化財などは私もこれから関心を持つて学び、伝統の灯が消えることのないようなお手伝いができたらと思う。そして、そのため「入来花水木会」はこの入来の地で地道に活動していきたい。

そして最後に特筆すべきことがある。亡き母が「入来花水木会」で主催していた「入来薪能」の復活なのだが、薪能の檜舞台の点検をお願いしたのが昨年だったのだが、本年度は市からの助成金で修理をお願いしていると

ころだが、如何せん物資の高騰で市に提示していた予算では、とうてい賄えない事態となつてしまつて困つている。仕方が無いので、予算内で直せる箇所だけ直していただき、残りは来年に持ち越しの修理となるのだが、現在鹿児島県謡曲協会会長で「入来花水木会」の副会長である中西喜彦先生が宝生流の石黒実都先生をご紹介してくださるとのこと、秋に一度我が家の倉庫に眠る檜舞台と薪能会場となる清色城跡の入来小学校の校庭を石黒実都先生が見学にいらつしやる。しかも、今年宝生流が鹿児島県の能舞台（かごしま県民交流センター）で披露する演目が薩摩川内市ゆかりの「鳥追」なのである。このご縁を生かさないと手はない。

母が第4回「入来薪能」として薩摩川内市総合運動公園多目的広場で「観世流」の「鳥追舟」を公演したのは平成14年だから、

かれこれ21年も前のことになる。当時は鹿児島県にまだ能舞台が無かった時代だ。私は能の世界もまだまだ勉強不足で何もわかっていないのだが、能の源流は奈良時代からといわれ、鎌倉中期になると寺社公認のもと「座」の体制が生まれたという。戦国時代は武士に愛され、織田信長、豊臣秀吉にいたっては熱狂的に愛好していたという能。

特に野外で薪に照らされ演じられる能舞台は幻想的でこの世とはかけ離れた世界を見せてくれる。しかも薩摩の武士もかつては能舞台を堪能していたかもしれない・・・そんな風に思うと、やはり母が残した貴重な檜舞台は大切にし、これからもまだ役目を果たして欲しいと願うのだ。

色々欲張って、出来ることは何でもしたいと気ばかり焦るのだが、とにかく出来ることから少しずつ、この入来籠の為に、そしてそ



れは薩摩川内市や鹿児島県の為に繋がる活動だと信じて疑わないので、頼もしい素晴らしい仲間と共に、未来に向かって元気よく船を漕ぎたいと思っている。

(入来花水木会会長)

第6回入来薪能・薩摩守「忠度」(2005年8月27日)